碑について考える

杉谷伊吹

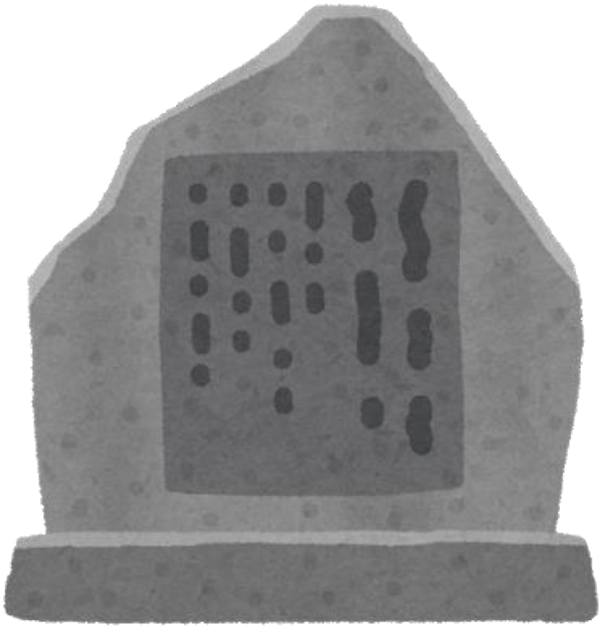
こんにちは、皆様如何お過ごしでしょうか。

今回は、私が考える「碑」の存在について書こうと思います。一般的に碑と言えば、記念として文字を刻んだ石の事を指しますが、私は拡大解釈して「忘れないための道標」であれば碑と表現します。具体的な例を挙げると、旅行先で買った思い出の品や、家族で撮った記念写真なども碑に該当すると考えます。また、先人の残した遺品や墓も、私にとっては碑の一つです。これらの碑が私にとって一体どんな意味を持つのか、それを言語化して確かめるという内容の文章になります。また、今回は完全な私見として書くので、仏教的な思想は保証されないことを先にお詫び申し上げておきます。

それではまず、碑が何故必要とされるのか、その理由について考察します。真っ先に考えられる理由は、人間が忘れる生き物だという事です。先ほど「忘れないための道標」という表現をしましたが、人間とは何もせずにほっておくと、大半の事を忘れてしまう生物なのです。個々で程度の差はあるものの、皆が皆そのはずです。この人間に備わった忘却という機能は良くも悪くも必要なものです。精神的に解決しきれない悩みや苦しみを抱えたとき、それに対して肉体的な方面から干渉して無理矢理遠ざけさせてくれるのです。「辛いことがあったら酒飲んで寝て忘れる!!」という感じですね。それでなくとも人生は色々なことが起きますから、それらすべてを頭に置いたままでは、煩わしくてしょうがない事でしょう。そう考えると、忘れることは自己防衛機能として必要なのだと分かります。ですが、問題はこの忘却機能がなかなかコントロールできないところにあります。大事な思い出だけ保存したままにしておきたくても、それが出来るほど便利では無い訳です。

もう一つ確認しておくべき点は、人間が抗えない変化の流れに身を置いている存在だという事です。大前提として、人間は生きている限り、常に「なにか」を失い続けています。それに伴い、新しく得るモノもあるのでしょうが、失ったものは基本的に帰ってきません。その具体例として、時間や命が不可逆なものだと言えます。身体の若さや故人は、どうあっても現実に戻ってきません。このようにして、過去は取り戻せないものの積み重ねで出来ています。それは当たり前の事で、私たちはその変化に慣れきってしまっているのだと思います。だから、碑というものが必要なのです。

自分を取り巻く「なにか」が変わってしまう前の事を、覚えておくための「碑」という存在。それがあることで、大事な思い出を心に留めておくことや、折に触れて思い返すことが出来るのです。また、これまで歩んできた道のりを知ることは、自分の現在地を知ることでもあります。たとえ、進むべき道を見失ったとしても、己の足跡を確認すれば、目指していた方向が分かるはずです。それが「碑」を「忘れないための道標」と表現する理由なのです。



本の紹介

『ウエズレーの国』

ポール・フライシュマン作
ケビン・ホークス絵
千葉 茂樹訳
あすなろ書房　１９９９年

今年の夏は多くの方にとって、これまでの夏とは違った過ごし方を考えなくてはいけなくなると思います。特に子供たちにとっては。

お家の中で静かに過ごすなら、こんな一冊はいかがでしょうか。毎年、夏の初めに、私が繰り返し読みたくなる絵本です。

主人公ウエズレーの住む町では、家の形はどれも同じ。そして、男の子の髪型もみんな同じ。ところが、ウエズレーだけ髪型はみんなと違うし、皆が大好きなピザもコーラも大嫌い。サッカーにも興味なし…ですからウエズレーは、いつもひとりぼっちでした。そんなウエズレーを両親は心配しつつも、そっと見守っているのでした。

そんなウエズレーに、夏休みの自由研究のテーマがひらめきます。

「自分だけの作物を育てて、自分だけの文明をつくるんだ！」

庭を耕すと、夜、西風にのって種が飛んできました。その種からは百科事典にも載ってない新しい作物が育ちました。実は桃といちごとリンゴが混ざったような味がします。さらにこの実を自分で作った機械を使って絞りジュースにしました。ジュースを入れるカップは硬い皮を乾かしたもので作ります。根っこもお芋のような美味しさです。また、茎からとった繊維から、暑い夏にもぴったりな帽子や、軽くて涼しい服も作りました。種からは虫除け効果のある油を搾り、販売もしました。ウエズレーは、この植物を「サルーシュ」と名づけます。これは、風にそよぐ葉っぱの音からとった名前です。

ウエズレーは、日時計を作り、一日を八つに分けて、自分だけの時間を決めます。新しい数の数え方も発明します。

自分の庭を、ウエズランディア（ウエズレーの国）と名付けました。ウエズレーは、庭の作物で作った道具で、一人で遊ぶゲームを考えました。すると、近所の子供たちがうらやましそうに覗きに来ました。そこで、みんなで遊べるゲームも考えてあげました。

夜は、庭の高い場所にハンモックをしつらえ、茎でつくった笛を吹き、空を見上げて、新しい星座を作ったりしながら涼しく過ごしました。（文字のないこのページは、うっとりするような美しさと静けさに満ちています。）

すべてのものに新しい名前をつけ、八〇個の文字も自分で作り、ウエズレー語も出来ました。種からとった油にススを混ぜて、インクを作り、ウエズランディアの歴史を、ウエズレー語で書きあげました。

夏休みが終わり、学校が始まる頃には、ウエズレーは、もうひとりぼっちではありませんでした。

小学校の子供たちに絵本を読むことを何度もしてきました。この絵本をきいてくれる子供達の顔つきがどんどん変わっていくのに気が付きます。「自分が面白いと思う事は大事にしていっていい」というメッセージを受け止めているからでしょうか。この本が、子供たちの心に「未来の種」を植えつけてくれているのではないかと思います。子供だけでなく、新型コロナウイルスによる自粛生活の影響で疲れを感じている、大人の方にもお薦めしたい一冊です。

（杉谷　登紀子）

真宗人物伝（四十九）

杉谷　浄

鳥喰（とりばみ）の唯円（ゆいえん）と河和田（かわだ）の唯円

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の最後の一人である鳥喰の唯円です。

唯円といえば『歎異抄』の著者とされている唯円もいますが、この唯円と二十四輩の唯円とは、別人であるという説が有力です。この場合『歎異抄』の唯円を「河和田の唯円」二十四輩の唯円は「鳥喰の唯円」と言います。

「鳥喰の唯円」を開基としている西光寺（茨城県常陸太田市）の寺伝によれば、唯円の俗姓は橋本伊予之守網宗といい、武蔵国猶山の城主の家に生まれたとされています。そのまま城主になるはずでしたが、一人息子の清千代丸が病により八歳で死亡してしまいます。これを嘆いた網宗は、弟に城を譲り修行者となります。諸国を巡り修行している時、常陸国那珂郡鳥喰村（茨城県那珂市豊喰）の空き家で一夜を過ごしていると、薬師如来が夢枕に現れ親鸞聖人のもとへ行くようにとの霊告を受けました。そこで稲田におられた親鸞聖人に会いに行き弟子となります。唯円は親鸞聖人の有縁の地で仏法を伝えるようにとの仰せに従い、鳥喰の地に寺を建立し、円寿院本泉寺と称しました。その後、水戸頼房公の命により現在の地に移転した折に、山号寺号を鳥喰山無量光院西光寺と改めたと伝えられています。

同じく「鳥喰の唯円」を開祖とする本泉寺（茨城県常陸大宮市野上）の寺伝では、唯円の俗姓は鳥喰六郎兵衛尉朝業という武士で、親鸞聖人の弟子となり鳥喰村に本泉寺を建立したと伝えられています。その後、親鸞聖人の孫にあたる如信上人の後見となり、更に本願寺をつくられた覚如上人の後見ともなったと伝えられています。本泉寺はその後、江戸氏と佐竹氏の合戦などに巻き込まれ各地を転々としますが、水戸城主・徳川光圀の命により水戸領内に戻り、野上村に再興され現在に至っています。

一方で「河和田の唯円」を開基とする報仏寺（茨城県河和田）の本尊台座銘には「当寺開基唯円大徳」という銘と「正応一（1288）年八月八日没」との記述があります。『慕帰絵詞』によると、この年の初めに、唯円は上洛して、覚如の仏教に関する質問に答えています。このことは覚如の『口伝抄』にも書かれています。当時としては高齢であった唯円は、死を覚悟して京都に赴いたこのかもしれません。唯円はこの後関東には帰らず吉野に向かいます。奈良吉野下市の秋野川のほとりに、以前、河内の慶西坊から頼まれ念仏の教えを説いていた庵があったのです。ここで唯円は最期をむかえます。六十八歳でした。この庵は現在、立興寺となり裏山には墓があります。

河和田の唯円の出生にはいくつかの伝説があります。その一つが、親鸞聖人の義理の孫説です。最後まで親鸞聖人のお世話をしたのは末娘の覚信尼です。覚信尼は、日野広綱に嫁して覚恵を出産しますが、広綱の没後に小野宮禅念と再婚して唯善を生んでいます。小野宮禅念も再婚であり、先妻との間の子供が唯円であるというのです。唯善は、当初密教と修験道を学びますが、その後唯円を師として念仏に改宗します。実際に唯善が唯円のもとで学んだことは『存覚上人一期記』に唯善が「奥郡川和田」に住んでいたという記載があることから推察されています。もし、唯円が小野宮禅念の子供であるのならば、この二人は異母兄弟ということになります。唯円と唯善という名前が似ていることからこのような話が生まれたのかもしれません。唯善はこの後、関東で専修念仏が禁止されそうになるのを止めるなどの活躍を見せますが、異父兄の覚恵と大谷廟堂の相続争いに敗れ京都を追われることになります。

「河和田の唯円」と「鳥喰の唯円」の出生に大きな違いがあることから、この二人が別人であると考えられているのです。しかし『二十四輩牒』や『親鸞聖人門侶交名牒』には「鳥喰の唯円」一人しかいません。『歎異抄』を書き覚如や唯善に念仏を教えたような方が高弟に数えられていないのは不自然です。もちろん、高弟に数えることが出来ないなにかしらの理由があった可能性も考えられますが、鳥喰と大和田は数キロしか離れていないことからも、同一人物であるとも考えられます。

もし吉野を訪ねる機会があれば、ぜひ墓参し、在りし日の唯円大徳に心を馳せたいと思っております。

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町商店街にある「いちょう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっています。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますのでお気軽にご参加ください。

徳法寺仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師　徳法寺住職　杉谷淨

八月　奈良仏教２　仏教と道教・神道の関係
九月　奈良仏教３　南都六宗と国家仏教
十月　平安仏教

七月から奈良仏教に入っています。当時、天然痘やハンセン病は、仏教のおしえを守らない者に対する仏罪であると考えられていました。飛鳥時代に流行した天然痘を抑えるために各地に仏教寺院が造られます。奈良時代になると、更に天然痘が大流行することになり、全国に国分寺が造られ、平城京には巨大な毘盧遮那仏（奈良の大仏です）が造られることになります。これらの建造のための課税と労役が、天然痘に苦しむ庶民の生活をさらに苦しいものにしてしまい、多くの流民を生むことになります。

一方で、僧尼令により民間伝道を禁じられている中、処罰されることを覚悟の上で庶民の中へと入っていった行基のような僧侶も現れます。

奈良時代は、国家仏教の中から、民衆救済の仏教が芽生え始めた時代でした。この流れが平安仏教へと繋がることになります。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

徳法寺秋彼岸展

阿部裕介　写真品展

九月十九日（土）から二十七日（日）まで、ネパールやパキスタンの山間部に住む人々の日常を写真に収めている阿部裕介さんの写真展を行います。

秋彼岸法要及び永代経法要

今回も当寺住職が法話をします。日程は、**九月二十二日（火・秋分の日）午後一時から午後三時ごろまで**です。読経の後、徳法寺住職の法話があります。

阿部裕介氏トークショー

二十二日法話終了後、午後三時ごろから写真家の阿部裕介氏によるトークショーを行います。美しい写真の向こうにある世界の話を是非聞いてみてください。どなたでもご自由にご参加いただけます。

表題揮毫　中田　八千代

徳法寺　石川県金沢市野町二丁目三二番四号
TEL　０７６（２４１）５２１９
ホームページ　http://tokuhou-ji.com